

銀河

全北海道退職教職員の会網走支部通信

№.94 2013年11月10日

道退職教網走支部事務局

〒090-0836

北見市東三輪1丁目83-35

TEL 0157-31-7551 FAX 0157-31-7559

◎13日(金)、東日本被災地に毎月絵本の読み聞かせに出かけて行くブックドクター”伸さん(ほがらか絵本畑)”の、「絵本で希望の笑顔を」の講演会と写真展を開いた。

◎震災が起きて日本中が心を痛めているとき読書推進”未夢の会”は、「何かできるか」と、市民に呼びかけ集まってきた絵本800冊を、昨年、伸さんに運んで頂いた。その後の子供たちの様子を報告する中身だ。

◎子育て真っ最中の方々も参加し、生々しい話に時折涙があふれた。家族を失った子供たちが保育園で、子供を失った保育士さんに見守られながら、絵本に触れ屈託のない子供たちの笑い声が聞こえるような写真と映像も紹介された。◎「現状では想像力がなくなって落ち着かない子供が増えているが、全国で一番落ち着いている地域は被災地であり、大人の役割としてこの笑顔を広げていきたい。絵本を読んでも自分が解放された。」と報告した。

◎日常の不快な心境に追われ愚痴が多く、震災や被災地のことが薄くなっていることを自覚せずにはいられなかった。そして”未夢の会”の存在を愛しいと思った。

◎原発再稼働、消費税増税、憲法改悪が子供の笑顔と笑い声を奪い取る3悪であり、被災地と関連して反対の署名活動を続ける。

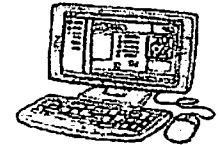
飯田禎子

懐かしの送金用通帳発見!

大橋 忠広

時折寝室に使っている部屋にあるパソコンに向かい、インターネットのYouTubeで音楽等聴いているが、その日に限ってどうした訳か目の前の本棚の書類立てが気になった。左から右へと順番に目で追って行った。暫く手に触れていないから埃が薄らと気にならない程度に被っている。追っている内に一つのクリアケースに目が止まった。何時もと変わらず何事も無く礼儀正しく触れられずにその位置を保っている。

その中には子ども達3人の大学と短大入学関連の書類やアパートや下宿の契約書等々が入っているはず、この7、8年程中味に興味等持ったことがなかったが、その日に限ってパソコンにも飽きがきていたからクリアケースを何と無く開けてみようと思った。



手に取る時、少しだけ宝物を探す気分になった。

まず、A4版の封筒の中の書類を出した。封筒の宛先を見ると、次女の短大の合格を知らせてくれた文書の入った封筒だった。通知を受け取ってからもう10年が過ぎている。感慨深く眺めた後、封筒の中身を広げた。だが、色々な当時の関係書類の入った小封筒が数通入っているだけで興味をそそられるものが無かったから後でまた見てみようと思った。それにクリアケースを一通り見た後の楽しみにすればいいと・・・。

しかし、その直ぐ後にこの文書を書くことになった小さな出来事で、それまでのことは全て私の頭の中から吹っ飛んでしまった。でもまだここでは本題には入らず、少々前段の話にお付き合いの程を・・・!

ゆきとどいた教育をもとめる全国署名

署名活動進んでいるでしょうか?期限の11月25日が近づいてきました。

網走支部の今年の目標は500筆です。ひとりでも多くの会員の皆様のご協力をお願いします。署名用紙の欄がぜんぶうまらなくてもだいじょうぶです。できた分だけお送りください。

「銀河」原稿募集のおねがい

内容は自由です。近況、日頃考えていること、写真、短歌、詩、川柳、絵などなんでもけっこうです。事務局へ郵送、FAX Eメールなどでお届けください。

住所 090-0836 北見市東三輪1丁目83-35 網走教育会館

FAX 0157-31-7559

Eメール minosima@rose.plala.or.jp

次女関係の書類の入った封筒の次に出てきたのが、長男の2001年度進学先の大学ガイド本、学校からの送付されてきた成績表や入部した空手部の年間予定表等だった。その時、ふと、長男を連れて初めて進学先のある沖縄、那覇空港に到着した際の南国独特の風景やそこにある空気というか雰囲気がとても新鮮だったことと、那覇市内をタクシーに乗り訪れた不動産屋さんのことと、長男が住むことになったワンルームマンションの玄関のドアを開け、部屋の中に入れてきた一人暮らし用の家具等運び込みある程度生活空間を整えて、再び、不足の家庭用雑貨を買い出しに行こうとドアを開けた際、ベランダや那覇市街の住宅街越しに見えた東シナ海が何故か印象深く蘇ったのと、翌日からこの風景の中で長男の生活が始まるのだなと、まあ、そんなこと等を思ったりしたのだが、それはそれとして、感傷的な思いに出来るだけ没頭せずスルーするようして、書類の束を探って行った。

もう捨ててもよさそうなものばかりなのだが、子ども達の成長の節目にあたる思い出の品々は何故か捨てられずに手元に置いてある。だからと言って何でもかんでも残して部屋中置き場所が無いぐらいに置いてあるということではなく、A4の書類数十枚程度なのだが…！

次に、長女の書類に手を着けた。短大の要項や下宿の契約書等の送付されてきた封筒、そこに懐かしい大家さんの名前を発見し、さて、どんな顔をしていただろう、等と思いつくとしても明確な輪郭は浮かんでこなかった。と同時に、長女が進学してから初めて我が家に帰省した時の違和感を覚えるような化粧姿を見て、私が呆然、愕然としたことを思い出し、少々ニヤリとした後、書類の真ん中あたりを開いたら・・・。

さて、ここから本題に入るだが、そこにあったのは？ 乞う、ご期待！

で、話の続きをする。書類の、その間に郵便局の通帳の入ったばるるの封筒を見つけたのだ。封筒からそれを取り出し通帳を見ると、長女の名前が書かれていた。短大に通っている間、毎月生活費もろもろをそこに入金し、キャッシュカードを持っている長女が郵便局で必要な金額を引き出す、そのために使用していた通帳だった。その普通預金の出入金の欄を捲っていったら、そこには何と11万円程（記帳前のこと）の残金があった。

が脈々と流れていたのではないのでしょうか。

講座の討論の中では参加者からもさまざまな証言がありました。

ひとりの女性が次のように発言しました。相内地区のあるお母さんのお話です。彼女は出征したひとり息子が帰ってきたら開墾してゆずるのだと傾斜地を拓いていました。相当眺めのよい畑になりました。しかし、まだ拓こうと山に向かって畑の頂上で作業していたある日、午前まだ早くに郵便配達夫がやってきたのです。お母さんは何だろうと思ったのですが受け取ったのは息子の戦死の公報でした。彼女の驚きと悲嘆はあまりにも大きく、その場に泣き崩れとうとう夕日が沈み暗くなるまで泣き続けたと言うので、「今でも悲しい」証言者として出られないというのです。

またある地区の集落では若妻たちが申し合わせて数ヶ月に1回集まって出征した夫、戦死の夫や兄弟のこと、厳しい労働や舅や姑のこと、子どもの病気や子育てのこと、自分のからだのこと・・・みんなで出し合っただけ泣きあって慰め励ましあったと言うのです。

端野町のあるお母さんは徴用で「出征」を命ぜられた愛馬を、その前夜あまりのいとおしさでその馬の首にすがりついたまま泣いて一夜を明かしたというのです。（森谷拓雄氏の教育実践）

悲しみも苦しみも枚挙にいとまがありません。戦中・戦後の苦難の時代、その中で人びとは労働し、たたかい、このふるさとを築いてきたのです。



次は中西サダ子さんの証言です。

「昭和19（1944）年の6月の初め頃だと思います。母は中西ヨシエ50歳代でした。当時は今の国道も馬車が通るくらいの狭い道でした。その日の丁度昼頃で、みんな食事などで家の中にいます。ひとりのみすぼらしい青年が、3人で便所の床板をはがして逃げてきたのですが、途中で2人が捕まり、私の家にたどり着いたと言うのです。棒頭たちが道のようにすから、この一軒家の中西の家に逃げ込んだに違いないと踏みこんできました。

母は青年を下に家畜を飼っている物置の2階の奥のわらや干草や餌を積んでいる奥深くにかくしてしまいました。そして母屋も物置も他の小屋の1階を全部開け放して「さあ見てくれ、どこでも探してくれ」と言いました。とうとう見つかりませんでした。

青年は朝鮮の大学生でソウルで捕まって・・・イトムカの寮（タコ部屋）に入れられ・・・ふたりが捕まって悔しい。けれどもどうにもならない・・・」と。私の家は斜面の上にあったのでどこからも見えるし、棒頭が見張っている関所はすぐ下でヒヤッとする日もありましたが、しかし、家族同様に生活し、畑仕事も一緒にし、母とよく話していました。近所には甥が手伝いに来ていると言っていました。

1ヶ月程経って母はいよいよ決めたようです。

7～8km下の大和地区にHさんEさんという朝鮮人の方が農業をしておりました。母は青年とよく話し合いをして、青年も強く望んだので、やがて先方に青年を連れて行くことにしました。夕方暗くなると熊も出ますし関所の幹部もうるさくなる。2～3ヶ所はあるが、どうしてもそこを通過しなければなりません。

そこで母は戦地に征ったひとり息子の兄の訓練用の軍服・戦闘帽をかぶせ、姉がゲートルをていねいに巻いてやったり、しっかり手伝いました。母は青年に「ふたりで行くんだけど、あなたはさっさと先のほうに歩いてほしい。私は棒頭と世間話をするから・・・」と話しをして家をでました。母はあるところでは、「自分の息子と歩いているのに問われる筋合いはない」とも言い放ったと言うのです。母は次の日のお昼頃無事帰ってきました。

私（弦巻）は生前の中西ヨシエさんとお会いしたことを思い出します。小柄でほんとに微笑みの可愛いおばあちゃんでした。私は北見に転勤後離農した方々から「おにぎりを作って逃がした」などさまざまお聞きしましたが、あのファッション的な戦時下でも私たちの先輩たちには勇気ある決断や行動、そのヒューマンな心

だが、この残金はしばらく記帳していないから記載されていないだけであって、残金も当然限りなくほぼ0円に近いだろうと思っていたが、ただ、少々気になったのは、平成16年当時でどんな風に、どんな使用目的で金を出し入れがなされていたのかということに興味事項は移っていた。

一つずつ項目を確認して行った。小額のお金の引き出しが多いから、まだ、お金に執着していない年代の長女を思った。大きな金額は下宿代だろう。また当時の使っていたauの携帯代の自動振り替え等も記載されていた。徒然に、お金にまつわる事や長女の学生時代に思いを巡らせているうちに何気なく、通帳の後ろの定期預金はどうなっているのだろうか、ページを捲ってみた。

ナ、ナ、何と、そこには、定期預金1万円の金額が記載されているではないか。即座に、茶の間に韓ドラにハマり、録画してあった連ドラをテレビ再生している家内に、「あいつのばるるの通帳見つけた。これって、生活費送金するための通帳だったよね。後ろの方に定期預金が残っているけど分かる」、「もうその通帳にはお金残っていないと思うけれど」と家内も素早く答えたが、「定期を解約したら、その確認の印鑑が下の欄に押印されるだろうからまだこの通帳にはお金が積まれているかもしれないよ。どう思う。それに、あいつキャッシュカード持っているだろうか？」等と色々想像を巡らし家内と話を続けた。

まずは、記帳する必要があると判断し、家内に速攻で町内の郵便局へ行って買った。

家内が、出かけている間、お金の使い方やキャッシュカードが無ければどのような手続きをすればいいのか、結婚し姓がかわっているので面倒な手続きがあるかもしれない等と考えている内に、家内は帰ってきた。

「お金があるみたい。1万円と少しの残金があつ

「あいつに電話してみ！」

家内に言うと、即、電話を入れた。

「キャッシュカード！」



長女は、はじめ何を言われているのかわからなかったみたいだが、詳しく説明すると内容を理解したみたいで、「カードは無くしたかもしれないけれど探してみる」と言う。

少しは時間がかかるだろうと思ったものの意に反し直ぐに返事が戻ってきた。「あったよ！」と長女。「で、暗証番号は？」と家内。10年ぐらい前のことだ。即座に思い出せないようであったが、家内も思い出してみるから、長女も思い出してと言って電話を切った。家内は、真剣に考えている。何せ、1万円のお金が手に入るか入らないかの瀬戸際に立たされている。

「多分、電話番号だと思う。以前住んでいた時の・・・！」それしか考えられないと冷静に家内は云った。毎月の給料日に郵便局で送金していた主婦としての自信がそう云わせた。違ったとしてもほかに考えられるのは長女の誕生日を暗証番号にした可能性があるぐらいだ。

その後、通帳の出入金のページを長女に写メールしたら、「笑いがとまらない(笑)」と返事がきた。

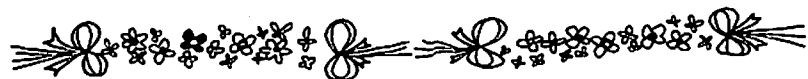
私も家内もその臨時収入でテンションが上がったが、長女ももしかしたら、棚ぼたもありそうだったのか思わなかったか定かではないが、テンションが上がったと思われる。長女は朝一番で、近くの郵便局へ行ってみると話してくれたので、翌日の郵便局の営業開始時間を待つことにした。

翌日、私と家内は父母の下に収穫の終えた畑の後片付けをするために出かけた。

後片付けも終わり、帰路に着いた時、キャッシュカードでお金をおろすことができたかどうか気になった。午前11時近くだった。長女に電話すると「これから郵便局に行く」という話だった。昨日のテンションは持続せず既に冷静そのもので、私と家内は何慌てているのさ、というような態度のように見受けられた。

長女からの連絡を待つことにした。ややしばらくすると「お金、おろせたサー」との少しかだけテンションを呼び戻したらしい声が吉報が入った。

その時、臨時収入が確定した瞬間だった。時を経て忘れかけていた定期預金払い戻し作戦大成功で年金生活者のテンションは最高潮に達したのだった。



語りつぐことの大切さを

～軍国主義と戦時下の人びと。その後～

2・11期言説復活反対北見市民集会講演のあらすじ その5

弦巻 宏史

戦時下で生きるということは、国の隅々までの、ひとりひとりの国民に今日の私たちでは考えられない苦難を強いることになるものです。

この地域の農民が体験した2～3の例を述べたいと思います。

○中西のおばあちゃん(厚和地区)

イトムカ鉱山は、水銀が重要な軍需物資ですので軍の管理下の野村興業が、朝鮮人、日本人のタコ労働者、更に「不良華人」として強制連行してきた中国人を地崎組などいくつかの会社(?)に下請けさせ、奴隷的に酷使させ生産をしていました。例えば中国人の労働者は殆どが41～45kg程度でやせ細り、シラミだらけで病気もはやり、死者は「クジラ何本」と呼ばれて、トロッコで留辺薬に下ろされ処理されたと言うのです。

その途中の厚和は無加川に沿った集落で山々が両側から迫り、小さな畑作地帯になっていました。イトムカ鉱山から命がけの逃亡が行われ、捕えられると残酷なリンチが加えられました。「藪の中で3人ぐらいで棒や剣先スコップで撲って血や肉片までもとんでいました。それを見た私は2～3日食べられませんでした。」(N夫人) 夜は道にも川にも縄や針金を張って捕えるというのです。逃亡者には懸賞金がかかけられ、助けたものは国賊と呼ばれていました。私(弦巻)は、元棒頭から「国からあずかった者を逃すわけにはいかない。捕まえても元気なままだったらこちらがやられるかも知れない。殺つてしまえば始末に困る。半殺しにし連れて帰るのだが、難しいんだ。俺らも苦勞したんだ。」と言うのです。従って住民は非国民扱いされることや後難を恐れて、他言は決してしませんでした。逃亡者をかくまい、衣食を与え、更に逃げ道を教えていました。

